

Part3 フェムトセル市場の普及・拡大シナリオ

狙うべきは「ホーム市場」

今秋以降、かなり活発化していくとはいえ、フェムトセルの秘めるポテンシャルからすれば、まだ「助走期間」。失速を避け、新産業創出へとつなげるためのポイントは何だろうか。

文 飯塚周一(情報流通ビジネス研究所 所長)

フェムトセルは、どんなカーブを描いて普及していくのか。あるいはそれ以前の話として、携帯電話サービスのなかで本当にメジャーな存在になっていくのであろうか。

フェムトセルによって提供されるサービスは、3つのタイプに大別できる。屋内カバレッジの改善や宅内の高速データ通信といった、これまでの延長線上にある「携帯電話サービス」、固定と携帯電話の両方にまたがって有機的な連携を図る「FMCサービス」。まずは、これら2つがメインとなるものとみられている。

その先にあるのは、FMCをさらに発展・高度化させて家庭内にある各種の機器やセンサーなどと連携する

「ホームネットワークサービス」だ。

こうしてフェムトセルは、大きく3段階のステップを踏んでいく。基本的には、LTEなどへのネットワーク移行とともに、サービスが高度化していく形となるだろう。

当面続く「助走期間」

滑り出しは、屋内エリアの補完サービスが中心になる。これは、フェムトセルが誕生したそもそものコンセプトだ。3Gエリアが整備されていない国の事業者がこれに飛びつき、実証テストを実施した例も少なくない。だが、屋外のマクロセルベースで3Gエリアが全国に行き届いている日本で、積極的なセールスポイントになる

とは、到底考えられない。

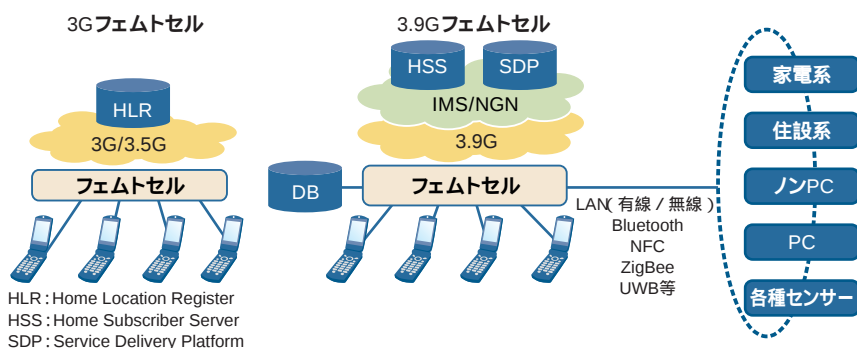
もちろん、相応の意義はある。今のところフェムトセルは、マクロセルに影響を与える可能性がゼロとはいえない。実需はともかく、屋内カバレッジ対策用に商用サービスとして走らせながら、影響がないことを実証してみせることは、重要なポイントになる。

それに加えて国内の携帯電話ネットワークは、3Gから3.9Gへの大転換期に差しかかっている。また、固定網の方もFTTHへの張り替えが急務とされ、その先にはIMS/NGNへのマイグレーションという血液交換が控えている。これらの意味するところは、アクセス系ネットワークはもとより、端末にいたるまでのフルIP化だ。ちょうどその端境期にあたる今は、互換性など次世代システムとの関係性を無視できないこともあって、たとえ技術的に可能でも、フェムトセルのフルサービスの提供がしにくい状態にある。

このように、現在は実質的にプレ・サービスの段階、いってみれば本格サービスの展開に向けた助走期間に相当する。このステージでは、屋内電波環境の芳しくない一部のユーザーがメインの需要層となる。

あとは、フェムトセル内に限定した通信料金の割引や、帯域をフルに用いる高速データ通信といったサービ

図表3-1 3GフェムトセルとLTEフェムトセル



出典：情報流通ビジネス研究所作成（<http://www.isbi.co.jp/>）